

ある並べ方をすれば、
本は時間と空間を超えていく

図書館と美術館と博物館が融合した、これまでに見たこともない
巨大な文化施設が武蔵野の地に出現した。その構想に
計画段階から参画し角川武蔵野ミュージアムの館長に就任した
松岡正剛さんが語る「創造力が想像力を喚起する」ミュージアム。

聞き手 ● 渡邊直樹 本誌編集長 構成・文 ● 丸山貴未子 撮影 ● 藤牧徹也

松

巻頭インタビュー

岡

正

剛

Seigow Matsuoka

1944年、京都市生まれ。

早稲田大学仏文科出身。

71年に雑誌「遊」を創刊。

日本文化から生命科学、システム工学まで

多方面におよぶ研究を情報文化技術に

応用する「編集工学」を確立。

東京大学客員教授、帝塚山学院大学教授などを経て、

現在、編集工学研究所所長、インス編集学校校長。

著書に「知の編集工学」「日本という方法」ほか多数。

角川武蔵野ミュージアム館長
編集工学者

本と出会い、ときめき ドラマが起る場所

渡邊 素晴らしいミュージアムができましたね。松岡さんはミュージアム全体の館長ですが、まずは監修された図書空間である「エディットタウン」のことからお聞かせください。

松岡 かつて丸善本店にプロデュースした「松丸本舗」などもその一環ですが、もともと本の息つかいや賑わいが感じられる本の街、図書館をつくりたいという思いがありました。図書館が使われている「十進分類法」は本を管理する方法としては優れているかもしれませんが、しかしこの並べ方では賑わいはいは生まれません。本来、読書空間というのは本と出会い、ときめき、それが本屋なら買って帰ったり、図書館であれば閲覧したりというドラマが起るような場所であった方がいいわけです。

エディットタウンの構想を立てるとき、最初に浮かんだのは、香港や（東京の）戸越銀座のような賑やかな街の中に、ダーツと本棚が並んでいるというイメージでした。

実際にできあがった「ブックストリート」は4m近い天井高があり、そこ起伏のある本棚が並び、ワインディングしながら50m続きます。この「ブ



「ブックストリート」は9つの書域からなる。

書院造りの 違い棚のような 本棚がほしい

ックストリート」を抜けると、高さ約8m、4階から5階へ吹き抜けの見上げるような「本棚劇場」にたどり着く。あたかも大きな井戸か、円筒形のピラミッドの中にあるような、360度本に囲まれた空間です。

渡邊 本棚劇場は圧巻ですね。「ブックストリート」がワインディングしているのもいいと思いました。

松岡 あれは設計の隈研吾さんのアイデアで端から端まで見通せない方がいいと。いいですね。こちらから隈さんにお願したのは「書院造りの違い棚のような本棚がほしい」ということでした。左右から棚が交じり合ったり、突然カーブしたり、奥行きも高さも違うユニットが無限に組み合わせる本棚がほしかった。そこを歩きながら、時にはスナックを食べたりする雰囲気だ

ったり、また元の棚に戻したりするうちに、とにかく本に触ってもらいたい。本の表紙、その絵柄、タイトル文字、著者、テーマなどその本からにじみ出てくるもの、語りかけてくるメッセージ世界をまずは感じてもらって、それからだんだん本の中へと入っていったらえればと考えました。

渡邊 配架がユニークで興味深く、眺めているだけでワクワクします。

松岡 ストリート全体は「記憶の森へ」から「個性で勝負する」まで9つの書域からなり、その中にそれぞれ書区があり、さらに書列があるという3段階で構成しました。なおかつ、その段階ごとにワードをつけたんですよ。天井からは「大友以前 大友以後」のような、看板めいたレコメンドルーフがいろいろぶらさがっています。これは若いアーティストや美術学校の学生に作ってもらい、角川大映スタジオの美術担当者が仕上げをした。書区にはステップワードという見出しが並びます。

「記憶の森」なら「神話から自然へ、私たちの記憶の原点へ」という具合です。さらに最後に小さな豆本にキーワードをはさんであちこちに置いた。例えば、「仕事も暮しも」の書域に、食と健康に関する書区があり、「死」

本に関しての「勘」が動かなくなっている時代だ、という松岡館長。



とは何か「死すべき定め」といった死を扱う本が並んだ書棚に、「死ぬのはこわい」というキーワードが置いてある。死という、少し敬遠されがちなテーマも、「そうだよな」と手にとってもらうためのワーディングです。

なぜこんな仕掛けを考えたかという、今は本に関して「勘」が働かなくなっている時代なんです。たくさんあるレトルトカレーの中からどれを選ぶか、あるいは大久保のコリアンストリートでどの焼き肉屋に入るか。私たちは経験値を生かしながら、モノや店

変でしたでしょう。
松岡 私が校長を務めるインターネット上で編集術を学ぶ「イシス編集学校」の卒業生で、師範もしくは師範代となっている750人のうちから50人を選抜し選書チームを作りました。9つの書域ごとに選書リーダーを定め、実際に本を5万冊ほど取り寄せて選び出していく作業をフルで9カ月やり、最終的には約2万5000冊を所蔵しています。

さらに本を右から並べるのか左から並べるのか、オーダーまで決め、全体を作り上げていった。

来館者はここから自由に本を抜き出し、散らばっている椅子やテーブルで、あるいは「エディットタウン」内で読んでもらう。その後は元の棚ではなく、返却専用のドロップボックスに戻してもらうようにしています。

連想と組み合わせで できあがった書棚

渡邊 配架の基本方針のようなものがありますか。

松岡 「エディットタウン」の大きなコンセプトとして「アソシエーション」、つまり「連想する」組み合わせる」という考え方を貫いています。

例えばラーメンに関する本といても、いくつもの切り口がある。ラーメン好きの林家木久蔵という人がラーメンの本を書いたとすれば、木久蔵の落語はそこからまったく切り離せるわけではないし、中国文化、食文化もそこに関わってきます。そういう連動をさせて棚が作られています。

これをさらに押し進めて、最終的には連想検索空間とも呼べるものを目指したいと思っています。館の所蔵品の電子化を進める予定なので、そのうち自分の好きな言葉、例えば「夏目漱石、手塚治虫、岡崎京子、鬼滅の刃」を入力すると、「エディットタウン」にはどのような関連の本があるのか、出てくるようにしたい。探索機器の名前もすでに決まっていて、「レンサクくん」とか「レンサクちゃん」と我々と呼んでいます（笑）。

渡邊 松岡さんは連想ということを目本文化の大事な特色ととらえていらっしゃるんですね。編集という仕事のキモもそこにあるように思いますし、ある意味、人間にしかできないことかと思っていました。が、「レンサクくん」がしてくるわけですか。

松岡 現在のグーグル型のネットワーク上の検索システムは、協調フィルタ

リングというアルゴリズムを使っていますが、それ自体がゆるい連想力を持っているんですね。コンピューター用語ではリンクするといいますが、人の頭の中ではそれは連想的に結びつくリスカッピング（ゆるやかな連結）となります。これまでの多くの経験から、一見関連のなさそうな本と本の間にもやわらかくゆるい関係があるというところを、私のグループは連想的データベースの束として持っています。

一例をあげると、2000年から20年間、私はネット上の『千夜千冊』というサイトで夜ごとに1冊ずつ本を紹介してきました。それが求龍堂からは大型本のセットとして、あるいは角川ソフィア文庫では『千夜千冊エディション』という形で出版されています。

この『千夜千冊』の中にも、連想空間、ゆるいつながりが一種のレイヤーとしてできあがっているの、その辺も今回の選書に生かしています。

だからこそ、本は違い棚に並べたかったんですね。平面的に揃えるのではなく、あるところでは前に出たり、逆に引っ込んだり、思わぬところでつながっていたりという空間構造にしたかったのです。これによって、連続と連続、断絶と飛躍、重なりと開き、こう

そのものが発している違いを感じ取って選んでいるわけです。そういう勘が本に関しては鈍くなっている。そこで本の発している違いを感じてもらえるように、キーワードを並べたり、書棚にはめ込まれたモニターに映像を流したりして誘導しています。

本の並べ方もすべて指示しています。こだわったのは横置き。そうすること自分の部屋で自分の本棚に向き合っている雰囲気を出したかった。まるでベッドサイドに本を積んでいるようで、本をかなり近く感じてもらえるようになったのだと思います。

渡邊 しかし、これだけ並べるのは大